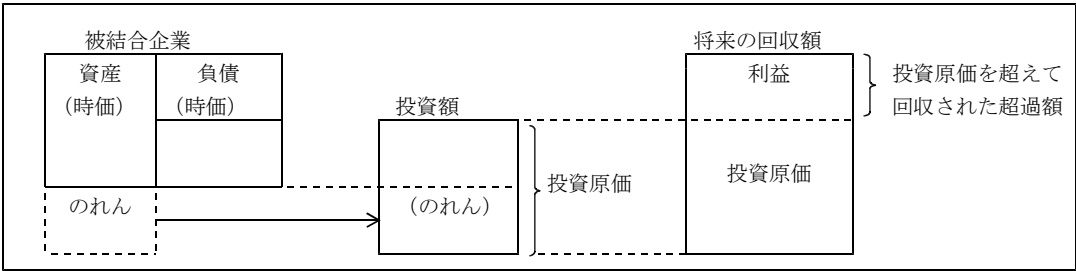


確認問題集 セレクト解説 第9回目

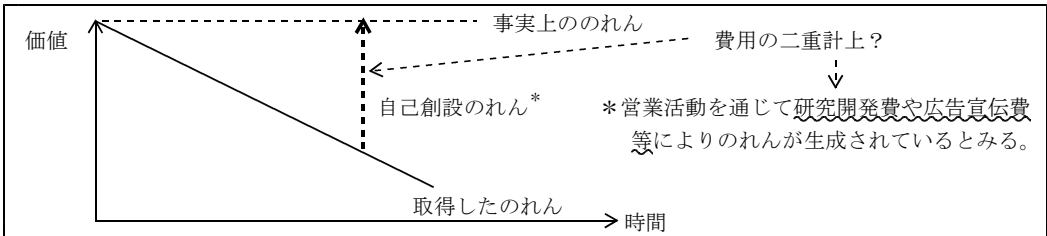
P211 【第30章 企業結合】19.
のれんは投資原価の一部



P212
(内部源泉による成長との比較)

内部源泉によって成長	M&Aによる企業拡大
この場合、投資額に見合った利益（内部留保）を獲得しておく必要があり、企業拡大に時間を要する。	内部源泉による成長に比べて、短期間で投資を実現出来る。そのような面を反映するためには、のれんを償却すべき。

P213
(自己創設のれんとの関係)



P211 【第30章 企業結合】 21.

(1) 非流動的資産に対して比例的に配分する見解

- 負ののれんは、被取得企業の資産の時価を測定する手続上の不備により、特定の資産が過大に評価されたことを原因として発生すると考えられる。よって、時価の測定を誤る可能性の高い非流動的資産(土地等の固定資産)から比例的に控除する形式で配分すべきである。

過大評価 の可能性	→	土地等 100		適切な 評価	→	土地等 90		対価 90	
--------------	---	------------	--	-----------	---	-----------	--	----------	--

(2) 発生時の利益として処理する見解

- 負ののれんは、何らかの理由でバーゲン・パーチェス(公正価値よりも低い価格での取得)が行われた結果発生するものと考えられる。よって、このような原因で発生する負ののれんは、異常性の高い一時の利益として処理すべきである。

資産 100		負債 50		
		純資産 50	対 価 20	← バーゲン・パーチェス
			異常利益 30	

(3) 規則的償却

- 非流動性資産への配分や、発生時の利益とする立場は、負ののれんの発生原因に対応した会計処理を行うものであるが、想定される発生原因を合理的に判別することは実務的に困難であり、恣意的な会計処理にもつながるおそれがある。よって、負ののれんの発生原因が明らかな場合を除き、のれんと同様に規則的償却を行うべきである。